

内橋克人さん死去

89歳

本紙客員論説委員

評論家、共生経済提唱

市場原理主義に警鐘を鳴らし、「共生経済」の大切さを訴え続けた経済評論家で神戸新聞客員論説委員の

内橋克人（うちし・かつと）氏が1日午後4時37分、急性心筋梗塞のため神奈川県鎌倉市の病院で死去し



神奈川県鎌倉市の自宅でインタビューを受ける内橋克人さん＝2011年4月

た。89歳。神戸市須磨区出身。葬儀・告別式は4日、親族のみで営む。喪主は妻泰子さん。（26面に評伝）

1957（昭和32）年、兵庫県立神戸商科大（現兵庫県立大）を卒業後、神戸新聞社入社。経済記者を経て、67年に独立した。技術者の挑戦を通して企業と人間の接点に焦点を当てたシリーズ「匠の時代」で脚光を浴びる。

経済の現場を丹念に歩き、市場原理主義や規制緩和万能論に突き進む政治経済の流れに厳しい批判を続けた。「規制緩和という悪夢」「共生の大地」「浪費なき成長」などの著書を相次いで出版。

1995年の阪神・淡路大震災時は、開発優先型の復興施策に対し、市民の立場に立った地域再生の重要性を強調した。また、東京電力福島第1原発事故後、原発再稼働に動く政府や経済界に対して「合意なき国策が独り歩きしている」として脱原発の活動にも参画した。2013年には自伝的作品として「荒野渺茫」を出した。

内橋克人さん死去

人重視の経済に信念

【評伝】市場原理主義に警鐘

「今日も明日もつなぐ人ひとりの営みが経済なのであり、その営みは、存在のもっと深い奥底で、いつまでも消えぬという価値高い息吹としてありつづける」（『共生の大地』）。1日、89歳で亡くなった経済評論家、内橋克人さんの60年に及ぶジャーナリスト活動の底流に流れていたのは、市井の人々への温かなまなざしだった。



神戸新聞の経済部記者時代の内橋克人さん＝1964年

1967年、神戸新聞で「さ」を感じたという。焼夷弾の下を逃げ感った。67年、フリーとして独立1957年、神戸新聞で「後、夕刊フジで連載した『匠』の時代」は後に数多くの文壇記者として歩みだした際、中小零細企業の取材に打ち込んだ。中内功氏（故人）の熱意に触れたのもこのころだ。「神戸」という地域と経済活動が重なる場の大切

付けられていた。その後、競争が全てという市場原理主義や規制緩和論を怒りともいえる激しい態度で批判したのも、人間重視の揺るぎない思想があったからにはかならない。



神奈川県鎌倉市の自宅でインタビューに応じる内橋克人さん＝2010年7月

軸ぶれることなく、40年近く、共著をこまめに、只書のような存在だった。国、民ひとりひとりを豊かにする経済政策の必要性を一貫して訴え、少数派に追いやられないがらも軸はぶれなかった。内橋さんの文章は時情にあふれ、人間の姿が立ち上ってくる。今春、出版した本で著作を紹介したのでお送りしたところ「自分もまだ書きます」という返信をもらい、励まされていったのだが。

見事な人生だった 作家・高杉良さんの話 刊紙で連載した『匠（たくみ）の時代』は視点、取材力、表現力いずれも見事なものだった。権力にすりよらない、おもねらないその気骨は特筆に値する。城山三郎さんと親交があったのも反戦の思想が背景にあったからだろう。市場原理主義が横行する中であつて内橋さんは守るべきものを大切に世の中に伝えてくれた。見事な人生だったと思う。

今、感染症が現代社会の弱点を突いて拡大している。暮らしは脅かされ、生業は苦境に沈む。一方、動くべき政治は混沌の極みにある。時代を見据えた筆一本のジャーナリストに共生の思想を今こそ語ってほしい。加藤正文

した国家に代わって、もう一つの選択肢がある」として「共生経済」を提唱。環境負荷ゼロ、脱原発、エネルギー自給、地産地消の豊かな地平を丹念な取材で指し示した。戦争の悲劇を伝えることにも熱心に取り組んだ。2013年、神戸空襲の犠牲者名を刻んだ慰霊碑が完成した際も「再び同じ犠牲者を出さないよう、いまを生きる者が心に刻む場所であるべき。集団的自衛権などが議論され、歴史の岐路に立っている」と憂いた。